

まえがき

北海道教育大学岩見沢校は平成26年4月、「芸術・スポーツ文化学科」を設置しました。これに先立ち、北海道教育大学は平成18年に大学再編によって道内5キャンパスにあった教員養成課程、ならびに新課程を改組し、岩見沢校は「芸術課程」と「スポーツ教育課程」の芸術・スポーツのみに特化されたキャンパスとなりました。以来9年になりますが、その間、芸術やスポーツの分野においてはさまざまな学生たちの活躍が見られました。

この2つの課程を土台として、このたび新たに開設された新学科は、「音楽文化専攻」「美術文化専攻」「スポーツ文化専攻」に加えて「芸術・スポーツビジネス専攻」の4専攻からなっています。

これまでの芸術課程とスポーツ教育課程が同居しているキャンパスは、実技科目という点で共通性をもっているため、何となくその共存理由が理解されそうですが、今回それをひとつの括りとした単一学科とした根拠はなにかということが問われると思います。

大学における学問単位としてのまとまりは、なんらかの学問上の共通項の上に成立します。芸術とスポーツのあいだに学問的共通項など存在するかという問題にどう答えられるのでしょうか。芸術における音楽と美術のあいだでも共通性を見つけることは難しいかもしれません。実技があるというだけでは学問的土台とは認められません。

そこで意味をもってくるのが「文化」という概念です。新学科の専攻名に文化が附されているのは、音楽や美術、スポーツの専門技能を備えたスペシャリストを養成することが目的ではなく、文化としての芸術やスポーツの喜びを地域の人々に伝え、共有することをねらいとしているからです。そこにわれわれは共通性があると考えています。もちろん、芸術とスポーツだけが文化なのではありません。しかし、芸術やスポーツのような、とくに生きたからだ人間固有の感性の統合を問題とする文化は、伝え方に他の領域とは異なる独自の方法論を必要とします。その基盤となる学問体系を構築することをねらいとして本書の出版が企

画されました。

文化を地域の人々に伝えるということを専門に学ぶ専攻として開かれたのが「芸術・スポーツビジネス専攻」です。ビジネスという名前がついていますが、教育大学の中にある専攻である以上、専門的な経済学や経営学、単純に言えばお金の儲けの仕方を学ぶわけではありません。ビジネスの手法を使って芸術やスポーツの文化を普及、啓発する仕方を考えていくことを目的とする専攻です。つまり、マーケティングによって顧客、社会のニーズを調査し、それに対応する商品を開発し、情報を広め、効果的な販売の方法を考えていくというビジネスの常道は、まさにわれわれの課題と合致します。

とはいっても、話し方が上手でも話の内容がなければ相手にされないのと同様、肝心の芸術やスポーツの専門能力が不十分であれば、学科としても、また「芸術・スポーツ文化学」という研究領域としても生き残っていきけるはずはありません。芸術とスポーツそのものに対する深い造詣が育まれてはじめて存在の意義が認められます。

さいわいにも、北海道教育大学岩見沢校には音楽、美術、スポーツ科学におけるすぐれた研究者が集結し、これまでに実践的な研究成果を数多くあげてきています。それぞれの分野での研究力は備わっているので、これからは分野を超えて協力できる研究体制を整えていくことが課題となります。

これらのことから本書には多彩な内容の論文が織り込まれています。専門分野は多様でも、それぞれに共通する領域ごとに分類され、全体として「芸術・スポーツ文化学」という大きな一本の木となっています。

たとえば、文化としての芸術やスポーツの根幹のところを研究する「文化資源研究領域」、芸術スポーツにとって極めて大きな力を持つ指導法に関する「指導研究領域」、地域との関わりを探求する「地域文化研究領域」、芸術とスポーツが融合して活動する可能性を探る「複合文化研究領域」、そして芸術・スポーツ文化を社会に広め、喜びを作り出していく仕方を研究する「芸術・スポーツビジネス研究領域」の5領域から構成されています。それぞれの領域の内容については後ほど詳しく説明されますが、このような全体像を描きながら本書をお読みいただければ、個別の論文の関心を超えて、「芸術・スポーツ文化学」という学問体系を構築する基盤が理解されるのではないかと思います。

本書の企画が、「芸術・スポーツ文化学」という新しい学領域として形成される萌芽となれば幸いです。

北海道教育大学 岩見沢校担当副学長 佐藤 徹

芸術・スポーツ文化学研究

目 次

まえがき 佐藤 徹... i

文化資源研究領域

Wer ist der “Grand Uomo” der Eroica-Sinfonie Beethovens?

..... Friederike Kienle...3

1. Einleitung 4
2. Analyse der verschiedenen Betitelungen der 3. Sinfonie 5
 1. Ferdinand Ries 5
 2. Anton Schindler 6
 3. Das Titelblatt beim Wiener Musikverein 7
 4. Brief an Breitkopf und Härtel 9
 5. Erstausgabe (Oktober 1806) 9
3. Beethovens biografische Situation zur Entstehungszeit der Eroica 10
4. Der Aufbau der 3. Sinfonie 11
5. “Christus am Ölberg”, ein verkanntes, aber relevantes Werk Beethovens
 in Bezug auf die Helden-Gestalt, wie sie in der “Eroica” dargestellt wird
 14
6. Projektionsobjekte seiner Erfahrung 16
7. Universalität der Eroica 17
8. Fazit 18
Zitierte Literatur 18

視覚心理の観点による抽象絵画の構造理解

— 視覚の生理的メカニズムから生じる画面構造のしくみ — 新井 義史...22

はじめに 22
第1節 生理的システムとしての力動的恒常性 23
 (1) 感覚における恒常性のしくみ 23
 (2) 絵画空間の力学 = 視覚的力動性 24

第2節 画面 26
 (1) 画面枠の機能 26
 (2) 基礎平面の基本的特性 27
 (3) 心理バランスの構造図 28

第3節 図 31
 (1) 地と図の性質 31
 (2) 図=視的要素がもつ内面的性質 32
 (3) 東洋的表現にみる律動性 35

第4節 美的形式原理 36
 (1) バランス 36
 (2) リズム 39

第5節 分析事例 40
おわりに 42

メイカーズムーブメントが映像表現に与える影響 …………… 倉重 哲二…46

はじめに 46
第1節 メイカーズ ムーブメント 46
 (1) メイカーズムーブメントとは 47
 (2) ツール 48
 (3) スペース 49
 (4) サービス 49
 (5) コミュニティ 49
 (6) ものづくりの「民主化」 50
第2節 映像とアマチュアイズム 52
 (1) フィルム「メイカー」 52
 (2) 個人向け映像メディアの変容 52
 (3) フィルムメディアの終焉 53
第3節 DIGITAL-CINECALLIGRAPH 54
 (1) フィルムを MAKE する 54
 (2) DIGITAL-CINECALLIGRAPH の概要 55

(3) 諸問題と結果	57
(4) 展開	58
おわりに	58

大学資源活用によるアダプテッド・スポーツの振興とその意義

— 共生社会の実現を目指す視点から —	……………	大山 祐太	62
はじめに			62
第1節 障害者を取り巻く社会環境の変化			62
(1) 障害者権利条約と法制度の整備			62
(2) より身近になるスポーツ			64
第2節 「アダプテッド・スポーツ」とはなにか			64
(1) アダプテッド・スポーツの基本的な考え方			64
(2) アダプテッド・スポーツの例			66
第3節 障害者に対する意識変容の手段としてのアダプテッド・スポーツの 可能性			67
(1) 障害者に対する「偏見」という障壁			67
(2) 接触経験が障害者に対する意識にもたらす影響 — 肯定的変容 —			68
(3) 接触経験が障害者に対する意識にもたらす影響 — 肯定的変容を示さない例 —			68
(4) 問われる接触経験の「質」			69
(5) アダプテッド・スポーツの可能性			71
第4節 大学におけるアダプテッド・スポーツの実践報告 — 北海道教育大学岩見沢校の事例 —			72
(1) 大学資源活用の意義			72
(2) アダプテッド・スポーツクラブの概要			73
(3) 具体的な活動内容			74
(4) 大学生の参加形態			76
(5) 今後の展望			76
おわりに			77

指導研究領域

ピアノ演奏に関する研究

— ピアノを演奏すること、ピアノを指導すること — …………… 水田 香…83	
はじめに	83
第1節 ピアノ、その音の魅力と楽器の能力	84
(1) 「聴き手」として魅力を感じる点	84
(2) 「弾き手」として魅力を感じる点	85
第2節 ピアノ作品の魅力	85
第3節 「音楽として」演奏するために	89
(1) 発音の研鑽	89
(2) ピアノへの期待を理解すること	91
(3) 音楽的表現のための準備	92
第4節 ピアノを指導すること	96
(1) 指導の段階	97
(2) 作品を活かすための演奏法	98
(3) 演奏者の耳になること	102
第5節 ピアノ研究の活用とその成果	103
おわりに	104

ピアノ指導における音

— 楽音と噪音のボーダー — ……………松永加也子…106	
はじめに	106
第1節 日本人の音感覚	107
第2節 噪音＝ノイズ、騒音	108

第3節	ケージ、サティ、アンタイル、ルッソロ、シェーファーらの取り組み	108
第4節	レッスンのできる取組みや考え方	110
	(1) ピアノから生まれる様々な音を楽しんで聴こう	111
	(2) ピアノの音が消える瞬間を聴こう	116
	(3) 無音を聴こう	116
	おわりに	118

思考力・判断力・表現力を伴った日本の音文化理解の学習効果の考察

— 箏二重奏曲「丹頂鶴 誕生そして旅立ち」の楽曲を通して —

.....尾藤 弥生...121

	はじめに	121
第1節	研究の背景と目的	121
第2節	日本の音文化について	122
	(1) 日本の音文化の特徴	122
	(2) 箏を通して体験できる日本の音文化	123
第3節	思考力・判断力・表現力の定義	123
第4節	先行研究	125
第5節	箏二重奏曲「丹頂鶴 誕生そして旅立ち」の楽曲を活用した実践概要	126
	(1) 実施概要と教材	126
	(2) 研究対象者と研究方法	128
第6節	実践結果及び考察	128
	(1) 日本の音文化の特徴と箏の奏法の理解と体感の状況に関する考察	129
	(2) 鑑賞のみと演奏して体感した場合での音文化の理解の違いの考察	130
	(3) 思考・判断を伴った日本の音文化と箏の奏法の特徴の関連づけに関する考察	134
第7節	結論	136

アートマネジメント手法を導入した「複合的鑑賞教育モデル」からみるコンピテンシー

— 北海道立近代美術館との連携授業プログラムから — ……………三橋 純予…	138
はじめに	138
第1節 北海道立近代美術館との連携授業プログラム	139
(1) プログラムの概要	139
(2) 展覧会までの授業プロセス	140
第2節 複合的鑑賞教育の理論的考察	150
(1) 中心となる鑑賞行為からの分類	150
(2) 鑑賞行為における2つの段階	151
(3) アートマネジメント手法の系統性と可逆性	152
第3節 能力観（コンピテンシー）からの考察	154
(1) 能力観における美術文化	154
(2) 授業モデルとの比較	156
おわりに — アートマネジメント手法の有効性 —	157

野外教育の理論と実践 …………… 山田 亮・能條 歩…

はじめに	160
第1節 野外教育とは	160
(1) 野外教育の定義	160
(2) 野外教育における環境教育と冒険教育	165
(3) 野外教育と組織キャンプ	169
第2節 野外教育の現状と課題	170
(1) 学校教育における野外教育	170
(2) 学校教育における野外教育の現状と課題	172
(3) 学校外教育における野外教育	174
(4) 民間団体における野外教育	176
第3節 野外教育の研究の動向	178
おわりに	180

地域文化研究領域

高齢者とコミュニティダンス ……………岩澤 孝子…185

はじめに 185

第1節 コミュニティダンス 186

- (1) コミュニティダンスとは 186
- (2) コミュニティダンスの実践者 187
- (3) コミュニティダンスにおけるコミュニティ 189

第2節 アメリカにおける高齢者の芸術文化・創造的活動「アンコール」

190

- (1) 老年学とアンコール 190
- (2) アンコールとコミュニティダンス 190
- (3) アンコール・クリエイティビティ 2013・シャトーカ・インスティテューション 191
- (4) 参加者の傾向 193

第3節 コミュニティダンスの実践 195

- (1) ダンス・エクスチェンジとコミュニティダンス 195
- (2) ダンス・エクスチェンジ独自のメソッド「ツールボックス」 197
- (3) 創作ワークショップのプロセスとツールボックスの役割 199

第4節 高齢者とコミュニティダンス 201

- (1) 高齢者と記憶 201
- (2) ダンスにおける「共有」と「模倣」 202

おわりに 204

地域にアート拠点を創出するコミュニティ

— 室蘭市民美術館と三笠プロジェクトの事例から — ……………三橋 純子…209

はじめに 209

第1節 室蘭市民美術館と新しい公共 210

- (1) 室蘭市の文化行政の特徴 210

(2) 室蘭市民美術館設置運動の経緯	211
(3) 室蘭市民美術館の特徴	214
(4) 「市民が創設した美術館」の課題と可能性	216
第2節 現代アート拠点の創出：三笠プロジェクト	217
(1) 三笠市と川俣正	218
(2) 「北海道インプログレス」の拠点としての三笠	219
(3) 市民による支援団体「三笠ふれんず」	224
第3節 地域におけるアートコミュニティ	227
(1) 地域におけるアートコミュニティの意義	227
(2) 地域コミュニティとアートマネジメント	228
おわりに	229

北海道におけるサッカー文化

— その現状と課題 — …… 越山 賢一・山本 理人・曾田 雄志・濱谷 弘志…232

はじめに 232

第1節 「アスリート」の現在、未来 233

- | | |
|----------------------------------|-----|
| (1) 日本サッカーの進化 | 233 |
| (2) アスリートのセカンドキャリアに関する意識 | 235 |
| (3) アスリート還流事業の現状と課題（学校への指導者派遣事業） | 237 |
| (4) まとめ | 239 |

第2節 コンサドーレ札幌の観戦文化 239

- | | |
|-----------------------------|-----|
| (1) 北海道における「観るスポーツ」の隆盛と観戦文化 | 239 |
| (2) コンサドーレ札幌の観戦者数 | 240 |
| (3) コンサドーレ札幌の観戦文化 | 244 |
| (4) インタビュー調査の結果から | 245 |
| (5) まとめ | 247 |

第3節 「支えるスポーツ」の現在 — 地域における実践事例 — 248

- | | |
|--|-----|
| (1) 岩見沢ジュニアFC1985の取り組みから — 次世代の育成 — | 248 |
| (2) サッカーカレッジの取り組みから — 大学から発信するサッカー文化 — | 252 |

おわりに — 未来への展望 — 257

芸術・スポーツ文化と「まちづくり」

—大学の資源を活かした「複合型地域アート & スポーツクラブ」 設立の取り組み— ……………	山本 理人…	260
はじめに		260
第1節 理念の構想—芸術とスポーツに関わる理論的背景—		262
(1) 文化という視点から		262
(2) 「遊び」という視点から		264
第2節 実践事例の検討—大学と地域—		265
(1) 大学を拠点とした「複合型地域スポーツクラブ」を対象として		265
(2) 大学を拠点とした「複合型地域スポーツクラブ」の課題		266
(3) ハイデルベルク大学の視察		266
第3節 北海道教育大学岩見沢校の取り組み		267
(1) あそびプロジェクト		267
(2) 「いわみざわ芸術・スポーツユニオン（通称:i-masu）」の設立		269
まとめにかえて—今後の展望—		270

複合文化研究領域

音楽遂行スキル向上に纏わるスポーツ・コーチング科学からのアプローチ

—芸術とスポーツの融合を目指して— ……………	寅嶋 静香・越山 賢…	275
はじめに—芸術文化とスポーツ文化の融合を目指して—		275
第1節 音楽遂行スキル熟練者の関節運動メカニズム		275
第2節 関節間制御→筋活動の制御→筋コンディショニングケアの利用へ…		277
第3節 motor unit の視点からみた音楽遂行スキル		279
第4節 動きと呼吸の支えにシンメトリーの概念も		280
第5節 コーチングとティーチングは芸術・スポーツスキル向上に不可欠		282
おわりに		283

社会の劇場化装置としてのイベント論（序説） ……………高尾 広通…286

はじめに	286
第1節 『1955 DAVID OISTRAKH Live in Japan』	287
第2節 日本初のイベントプロデューサー・小谷正一	288
第3節 イベント“学”への道	291
第4節 イベントとはなにか	293
第5節 イベントのひろがり	295
第6節 イベントの分類	297
第7節 万国博覧会とオリンピック	302
第8節 仮設と常設	306
おわりに	308

芸術・スポーツ団体によるコラボレーション事業の新たな可能性を探る

— P3 HIROSHIMA の事例研究を通して —

…………… 宇田川耕一・関 鎮京・角 美弥子・福原 崇之…310

はじめに	310
第1節 広島市の概要	311
(1) 広島市の現在	311
(2) 広島市の歴史	313
(3) 広島市の芸術・スポーツ文化	314
第2節 P3 HIROSHIMA について	315
(1) 概要、組織の目的及びその設立趣旨	315
(2) P3 HIROSHIMA を構成する3大プロ	316
(3) P3 HIROSHIMA の成立の経緯	322
(4) P3 HIROSHIMA の事業内容、活動事例	323
第3節 P3 HIROSHIMA 事例のインプリケーション	326
おわりに	328

芸術・スポーツビジネス研究領域

文化・芸術を通して、顧客との絆をつくる

一人びととの共通価値を、地域社会の中で生み出すために — …臼井 栄三…335

はじめに 335

第1節 世の中と顧客を幸せにするために企業活動がある 336

第2節 毎月一度、店舗がコンサートホールに変身する 337

第3節 お菓子から食文化を広め、定着させていく 339

第4節 55年間発行され続けている児童詩誌 340

第5節 広大な柏林の中に点在する美術館 341

第6節 北海道の自然が美術と建築を際立たせている 343

第7節 企業の活力を生むダイバーシティ・マネジメント 344

第8節 本業を基盤にして、企業の文化的価値を高めていく 346

第9節 インターナル・マーケティングで従業員の特性を活かす 348

おわりに 349

オーケストラ指揮者に学ぶリーダーシップの本質

— 小澤征爾はいかにして世界のオザワになったのか — ……………宇田川耕……351

はじめに 351

第1節 オーケストラにおける指揮者と楽団員の関係 352

(1) リーダーシップ研究対象としての指揮者 352

(2) インタビュー記事による楽団員の意識分析 353

(3) プロフェッショナル組織としてのオーケストラ 355

第2節 多元的知性 SPEED (スピード) モデル 355

(1) 指揮者の多元的知性 SPEED (スピード) モデルとは 355

(2) 多元的知性 SPEED が発揮されるステージ 357

第3節 指揮者と楽団員のキャリア形成モデル 358

(1) 指揮者と楽団員との4つの関係性 358

(2) 指揮者と楽団員のキャリア形成モデル 361

(3) 事例研究〈小澤征爾 世界のオザワ〉	363
おわりに	365

Jリーグクラブの順位と収入の関係

— パネル分析を用いて —	福原 崇之	370
はじめに		370
第1節 目的		372
第2節 先行研究		373
第3節 モデルの理論的枠組みおよび実証分析		375
(1) モデルの特定化		375
(2) データ		378
第4節 推定結果とその解釈		379
おわりに		387

アスリートの2次的活用に関する有効性と将来性

第1節 日本におけるスポーツ競技環境と欧米の比較	曾田 雄志	391
(1) 日本の実業団スポーツとプロスポーツの比較		391
(2) 欧米におけるクラブスポーツの意義		392
第2節 種目におけるアスリートの特性差		394
(1) 種目による性質差		394
(2) アマチュアとプロフェッショナルの性質差		396
(3) アスリートの長所、短所		398
(4) 社会のニーズと元アスリートが持つ可能性		399
(5) スポーツ教育の可能性		400
第3節 キャリアサポートの充実によるスポーツ産業活性の可能性		402
(1) キャリア形成システムの現状		402
(2) アスリートの自立のためのキャリア形成サポートによる産業創造		403
おわりに		405

あとがき 407

著者紹介 408